ひょうご人権ジャーナル

きずな KIZUNA

7 2020年 令和2年

特集 多文化共生

こころの壁を越えて、
互いに認め合う

INDEX

2 「時の経過と共に成長する社会と文化」
星野　ルネさん（タレント・漫画家）

3 「多文化共生社会に向けて」
山脇　啓造さん（明治大学国際日本学部　教授）

4 「多文化共生に向けた生活支援の取り組み
医療だけでは解決できない生活・労働・環境の問題」
黒野　利佐子さん（神戸常盤大学　准教授）

5 「一人一人が個性を持った同じ地球人として」
安田　彩香さん（NPO法人 ねひめカレッジ）

6 「少年院出院者を支える活動」
NPO法人　セカンドチャンス！

7 ふれあいサロン

8 「優しい心―コロナウイルス禍で」
林　芳樹さん（神戸新聞社　特別編集委員）

ひろげよう こころのネットワーク

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット　はばタン

来年に開催が予定されている東京オリンピック・パラリンピック競技大会では、国境を越えた交流が期待されます。言語や文化、生活習慣等の異なる人々が相互に理解し、共に支え合うことは、だれもが自己を生かし協働して地域づくりに取り組む力となります。

本号では、日本人と外国人が互いの多様性を受け入れ、尊重し合う気持ちを育み、共に生きる多文化共生社会の実現について考えてみましょう。

時の経過と共に成長する社会と文化

人権 インタビュー Interview

タレント・漫画家

星野（ほしの） ルネ さん

プロフィール

4歳の時に母の結婚に伴い来日し、姫路市で育つ。高校卒業後、兵庫県内で就職をしたが自分の生い立ちが人々の関心や共感を集めることを発見し、25歳で上京。タレント活動の傍ら、ツイッター上で発表していた自分の日常のエッセイ漫画が話題となり、2018年8月に『まんが　アフリカ少年が日本で育った結果』（毎日新聞出版）を出版。

星野さんはカメルーンから姫路市に来日しました。日本での半生をツイッターに連載し、話題となり「まんが　アフリカ少年が日本で育った結果」を出版しました。タレント・漫画家として活躍される星野さんにお話を伺いました。

Q 幼少期の思い出は

A 小学生時代、日本の学校では、カメルーンの人たちがニシキヘビや巨大なカエルなどを食べることに驚いたり、からかったりする生徒がいました。他方で、カメルーンでは、日本人がイカやタコ、生魚（刺身）を食べるということを気味悪がったり、驚く人がいました。国が違っても異質な料理や文化への反応は似ていると思いました。

Q 言葉の壁を感じましたか

A 4歳の頃に日本に来たので、最初は一言も日本語を話せませんでした。他の園児の言葉に耳を傾け、動作に注視していると、1年経つ頃にはかなりの日本語が話せるようになっていました。『話す』＝『生きること』という状況になれば人間の身体は全力で言語を吸収できるのでしょう。幼かったので吸収も早かったのだと思います。友人たちと遊びながら覚えたことは、最良の勉強方法であり、絵を描くことも遊びながら上達しました。

Q 多文化共生を実現させるために大切なことは

A まずは互いの存在へのリスペクトが必要です。日本に代々住んでいる人へのリスペクトが外国人には必要ですし、逆に日本人は異国の地、日本でたくましく生きている在留外国人へのリスペクトも必要です。その上で、在留外国人は日本の習慣や文化を理解し学ぶ努力が必要で、日本人は、日本の習慣や文化などに不慣れな方々が努力して歩み寄っている姿を認め、おおらかに受け入れる姿勢が必要でしょう。半歩ずつゆずり合う気持ちが、同じ列島で生きていく仲間として必要であると思います。

Q 今後の抱負は

A 私にはカメルーン人の母と、日本人の父がおり、両国の間で、それぞれの感性や文化を吸収し、見比べながら育った経験があります。そのため日本人の気持ちも、在留外国人の気持ちも、それぞれ一定の範囲で理解できるので、橋渡しのようなことを続けられれば幸いだと思っています。

Q 読者のみなさんへのメッセージ

A 国や社会というのは人間と同じで、どんどん成長し変化していきます。自分らしさが年齢と共に徐々に変化するように、日本らしさや日本人らしさも時代や状況に応じて変化を続けてきました。そしてこれからの時代の「日本らしさ」「日本人らしさ」というものがどんなものかを一緒に考え、創っていきましょう。

多文化共生社会に向けて

明治大学　国際日本学部　教授　山脇（やまわき）　啓造（けいぞう）　さん

プロフィール

明治大学国際日本学部教授（移民政策・多文化共生論）。総務省多文化共生の推進に関する研究会座長、東京都多文化共生推進委員会委員長。主著に『新多文化共生の学校づくり―横浜市の挑戦』（共編、明石書店、2019年）等。大学の担当ゼミでは、多文化共生のまちづくりをテーマに、地域での実践に力を入れている。

日本の外国人受け入れ政策は、1990年の改正入管法施行による日系人労働者の受入れや、1993年に始まった技能実習制度の創設を第1ステージとすれば、2019年の改正入管法施行によって、第2ステージに移りました。同年4月から、在留資格「特定技能」が創設され、法務省に出入国在留管理庁（入管庁）が設立されました。同庁は、それまで旧入国管理局が担っていた出入国管理と在留管理に加え、外国人支援や共生社会づくりも担うようになりました。

2019年12月末の在留外国人数は約293万人で、日本の総人口の約2％です。前年末に比べ、外国人の総数は約20万人（7.4％）増加し、過去最高となりました。

総務省と法務省

第1ステージで、地域そして自治体の多文化共生の取り組みを支援してきたのは総務省でした。2006年3月に「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、全国の自治体を支援してきました。さらに2017年3月には、全国の好事例を集めた「多文化共生事例集」を作成しました。

一方、第2ステージでも、総務省の取り組みは続いていますが、法務省（入管庁）は、この一年の間に全国の180近い自治体の外国人相談センターの設置や運営の支援を始めました。また、今年の夏には、全国の相談センターをサポートする国の「外国人共生センター（仮称）」を都内に設置する予定です。

コロナ危機と多文化共生

今年になって、新型コロナウイルス感染症が瞬く間に世界各国に広がり、日本でも、4月に緊急事態宣言が発令されました。コロナウイルスは、日本人であろうと外国人であろうと、等しく感染の危険があります。そして、社会の一部で感染が広がれば、社会全体の感染リスクが高まります。感染封じ込めのモデル国と見られていたシンガポールやドイツでも、外国人労働者の間で感染が拡大しました。

日本のコロナ対策にとっても、外国人住民を日本社会の構成員と位置付ける多文化共生の観点は欠かせません。また、今後しばらく、日本の新たな外国人受け入れは停滞すると思いますが、今こそ、中長期的な観点に立って、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく」（「地域における多文化共生推進プラン」より）社会づくりに取り組むべきでしょう。

多文化共生に向けた生活支援の取り組み

医療だけでは解決できない生活・労働・環境の問題

神戸常盤大学　准教授
黒野（くろの）　利佐子（りさこ）　さん

プロフィール

1964年生まれ。京都市立看護短期大学卒業後、神戸海星病院産婦人科に6年、外科に3年勤務。請われれば家庭訪問を行い、元患者とともに外国人用のパンフレットを英語で作成するなど、外国人のケアや保健指導向上に尽力。英米への7年半の留学中にテキサス大学修士課程で地域看護を学び、現在神戸常盤大学の老年と国際の分野を担当。

留学生や技能研修生の健康に関わる

NPO法人Onesselfさんに留学生の健康について相談をされ、1～2週間に1度の頻度で留学生向けに健康相談に応じる「しんかいち国際保健室」を始めました。ブータンからの留学生が上手に英語を話してよく協力してくれました。同郷の学生を連れてきてくれて、色々な話を聞くことができました。

彼らは、高校卒業時に豊かな日本で日本語を学びながらアルバイトで稼ぐことができ、資金を貯めれば進学もできるという夢のような話に惹かれて集団留学してきた青年たちです。留学資金や渡航費、仲介料の諸経費で、一人50万円から120万円程度借金して来日したそうです。ブータンでの大卒の初任給は約3万円程度ですが、ホワイトカラーの産業が育っておらず、若者の失業率が高いので、留学して卒業後も日本で就職し高収入が見込めるとなれば、浮足立ってしまうのも当然ではないでしょうか。

体がもたない バイトと勉強の両立

彼らが来日して直面する現実に、制限いっぱいの週28時間のアルバイトをしても、進学どころか、借金さえ返せない日本の物価の高さがあります。高度な日本語能力が不要で、効率のいいアルバイトとなると24時間操業の工場の夜勤になります。18時には出勤し、仮眠は2時間ほどとることができますが、帰宅は朝7時過ぎになり、日中は学校に行かなければなりません。日本語の勉強をしに来たのに、工場では外国人ばかりと一緒に働いていて日本語が上達するとは思えません。借金返済のため少しでも生活費を削減しようと10人以上で部屋をシェアし、食費を削り、その上まじめな留学生は寝る時間を惜しんで勉強しています。

今、20～29歳の新規登録結核患者における外国生まれの者の割合は前年から7.5ポイント増加し、70.4％となっており、総数も増加傾向に転じてきていることが懸念されています。このことは、彼らに過酷な生活環境を強いるこうした留学制度と、悪徳仲介業者の存在や、低賃金に依存した産業構造に課題があるといえます。

留学と技能研修制度についても、差別的な待遇で運用され、日本の貧富の格差、富の公正・公平な配分がなされない状況につながっています。能力が高いとされる外国人の方々には様々な恩恵・特権が与えられ、それ以外の方々は契約の間、家族と引き離され、人手の足りない3Kの仕事を任されています。こうした日本国内の矛盾や課題に私たち自身が向き合うことができて初めて、真の多文化共生社会づくりが可能になると考えています。

一人一人が個性を持った同じ地球人として

NPO法人　ねひめカレッジ（加西市国際交流協会）
安田（やすだ）　彩香（あやか）　さん

イメージからの脱却

留学中、「日本人の印象は？」と現地の学生に聞いたことがあります。すると、ある学生は「優しい」と答え、ある学生は「冷たい」と答えました。印象とはそれぞれの経験や受け止め方によって変わるものと、どちらの意見にも納得しました。ただ、どちらの学生も全ての日本人を見てそう感じたわけではなく、一部の日本人から受けた印象から、日本人とはそういう国民だとイメージしたのです。

私たち日本人も同様に、異国や異文化にはイメージで全体を判断しがちです。○○人は真面目で、○○人は明るくひょうきん。また、ゴミの捨て方やマナーについても、考え方や文化の違いを感じるでしょう。

しかし、こういったイメージに左右され、偏った見方をしてしまうのは避けたいところです。一億人以上いる日本人の性格を一言で言い表せないように、外国人を十把一絡げにすることもできません。つまり、固定されたイメージを取り払い、一人一人個性を持った同じ地球人として接することが大切だと思うのです。

気づきを増やす交流活動

ねひめカレッジは、同じ地域に住んでいる日本人と外国人の橋渡し役として、通訳・翻訳事業のほかスポーツ交流や文化体験、語学学習支援、外国ルーツの児童支援などに取り組み、国籍を超えた仲間づくりと文化交流を深めるべく活動しています。

イベントや教室に参加する外国人の多くは、普段接することのない人とのふれあいを求めています。日本人参加者たちは、初めは外国人住民の多さに驚き戸惑いますが、「会社同士の接点があった」、「案外近くに住んでいた」などの前向きな感想を持つ人も多く、実際にふれあうことで互いを知り、理解し合える貴重な体験の場となっています。このように、交流活動を通してお互いの距離が少しでも縮まり、新たな発見や気づきが心のふれあいにつながればと願い、日々取り組んでいます。

誰もが住みよい町をめざして

多文化交流と聞くと、国と国との交流というイメージを持つ人も多いかもしれませんが、実際には人と人の交流です。イベントや教室に参加することだけが交流なのではなく、出会ったときに交わすあいさつやちょっとした会話こそが、お互いの理解と、誰もが住みよい町づくりのきっかけになるのではないでしょうか。

プロフィール

大学在学中に台湾への交換留学を経験したことから、国際交流と言語学習に興味を抱く。現在、地元加西市の国際交流協会であるＮＰＯ法人ねひめカレッジにて、多文化交流事業や国際理解講座を実施するほか、企業や地域日本語教室の日本語学習支援に携わる。

当協会では毎年人権啓発に関するビデオを作成しています。

協会ビデオ紹介

令和元年度
人権啓発ビデオ

『サラーマット～あなたの言葉で～』

この作品の主人公・珠美は、新しく職場に来たフィリピン人のミランダに対し、様々な「違い」を「壁」だと捉え、面倒な存在だと感じてしまいます。しかし、自分とは異なる文化や考え方を持つミランダとの対立や交流を通して、珠美は新たな視点に気づかされ、「違い」は様々な問題解決の糸口になることも学んでいきます。珠美とミランダの姿を通して外国人は助け合うことができる対等な仲間であること、SNSを人の心と心をつないでいくために利用する様子を描きます。

「違い」は壁ではなく、自分自身を成長させ、地域を豊かにする源です。異なる文化の人たちを、共に未来をつくる新しい存在として尊重し、互いに高め合っていく。そんな多文化共生社会の実現をめざす人権啓発ドラマです。

字幕副音声付/36分/活用ガイドはDVDに収録

出演／真飛　聖、ＪＬ、金子　昇、草村　礼子ほか　企画／兵庫県、（公財）兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会　製作／東映（株）

●貸し出しについて
（公財）兵庫県人権啓発協会研修部
TEL 078（242）5355　FAX078（242）5360

●購入について
東映（株）関西営業推進室
TEL 06（6345）9026　FAX06（6345）6756

少年院出院者を支える活動

NPO法人　セカンドチャンス！

「NPO法人セカンドチャンス！」は少年院経験者による出院者支援をするために、2011年に創設。神戸地区活動代表の方にお話を伺いました。

Q 設立された目的は何ですか

A 少年院を出院した者にとって、出院後に直面する課題は各人において違うものであり、一般的に言う社会復帰は、簡単なことではありません。そうした少年たちの支えになれるよう、当事者と、サポーターが協力して、出院者の居場所をつくるために作られた団体です。私たちは少年院という同じ経験をしてきた仲間同士が集まって共通の経験や悩みを話し合い、活動を通して共に成長していくことを目的としています。

Q どんな活動をされていますか

A 東京、長野、京都、兵庫、福岡の各都府県で定期的にミーティングやレクリエーションを行っています。メンバーは少年院出院者を主体としていますが、交流会によっては保護司、元法務教官、会社経営者などさまざまな方が参加しています。各地のリーダーは少年院出院者が務めており、世話人として若い参加者をサポートしています。出院者がさまざまな人と関わり、話をすることによって人生を考えるきっかけを見つけたり感じたりすることを大切にしているので、非行の反省や更生を求めたり、教育や職業提供をすることもありません。参加者が良い子を演じたり、悪ぶったりする必要はなく、良き友人たちに囲まれてありのままの自分でいられる場所でありたいと思いながら活動しています。

Q 参加されてどのような経験をされましたか

A 私自身、中等、特別（旧法）と2度の長期少年院を経験したあとも、なかなか社会に溶け込めず失敗を繰り返しました。自分と同じ非行経験がありながらも立ち直った先輩たちの話を聞き、アドバイスをいただいたことが反社会的な行動から離れる力になったと感じています。20代後半に高校、大学へと進学し、現在は保育士として働いています。

Q これからどのような活動をされたいですか

A 団体の基本ポリシーに正直（Honesty）平等（Equality）尊敬（Respect）を掲げています。嘘をつかなくてもよい関係、対等な関係、お互いに尊敬しあえる関係を作りたいという思いを込めています。団体の活動を多くの人に知っていただき、仲間を増やしていきたいと思っています。

団体紹介

2011年少年院出院者と元法務教官の大学教授が出会い、少年院出院者が経験と希望を分かち合い、仲間として共に成長することを目的として立ち上げた自助組織。設立10年目。出版物に「セカンドチャンス！～人生が変わった少年院出院者たち～」（2011年　新科学出版社）「あの頃、ボクらは少年院にいた～セカンドチャンス！16人のストーリー～」（2019年　新科学出版社）がある。

子ども多文化共生教育の推進拠点

兵庫県教育委員会

子ども多文化共生センター

「子ども多文化共生センター」は、すべての児童生徒が互いを尊重し合い、多様な文化的背景がある外国人児童生徒等と、豊かに共生する真の国際化に向けた教育の取組や外国人児童生徒等の自己実現の支援をコーディネートするなど、多文化共生社会の実現をめざす教育を推進するために活動しています。

外国人児童生徒等の支援、子ども多文化共生教育に関わることなどについて、お気軽にご相談ください。

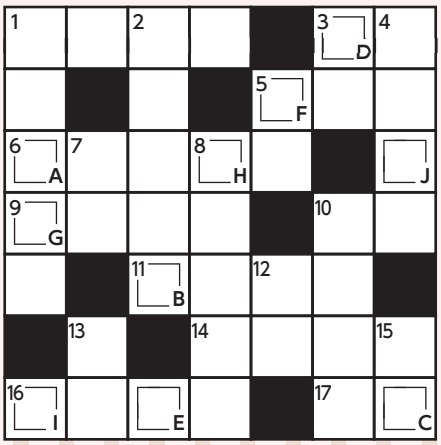
〒659-0031芦屋市新浜町1-2（県立国際高等学校内）
電話：(0797)35-4537　FAX：(0797)35-4538
●利用時間：平日（月曜日～金曜日）　9:00～17:00
●閉 館 日：土・日曜、国民の休日、年末年始
●教 育 相 談
　電 話 相 談　開館日の9:00～17:00の間
　面 接 相 談　予約制　*必要に応じて通訳をご用意いたします。
　メール相談　mc-center@hyogo-c.ed.jp
●ホームページ等から様々な情報を発信しています。

ホームページ　http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/
Twitter　https://twitter.com/hyogo_mc_center
Facebook　https://www.facebook.com/HyogoMcCenter

ふれあいサロン

投稿＆クロスワードで
「リラックスつぼ押し」を
プレゼント!

問 A～Jの文字を順番に並べると、何という言葉になるでしょう?



タテのカギ

1　世界中の国々の国旗。「会場を〇〇〇〇〇で飾る」
2　出しうる限りの力。「〇〇〇〇〇を尽くす」
3　ある表現や行為に込められた意図・理由。「感謝の〇〇を込めて拍手を送る」
4　何が重要か、値打ちがあるかという個人個人の思いや評価。人により国によりずいぶん違いますね
5　「〇〇の東西を問わず」
7　平等院鳳凰堂のある京都府南部の市
8　夏の夕方、戸外や縁側などに出て暑さをしのぎます
10　降り方によって“ざあざあ”だったり“ぱらぱら”だったりします
12　日本料理では昆布やかつお節で取ります
13　意見が合わなくても〇〇つきあわせるのではなく協調の道を探りたい
15　気が滅入ることがあっても適度に〇〇晴らしをしてうまく乗り越えましょう

ヨコのカギ

1　完璧で手落ちのないこと。「準備に〇〇〇〇を期す」
3　干したものは“するめ”と呼ばれます
5　「暗い〇〇〇を歩いても安全」という国はそう多くありません
6　異なる地域や組織などの人々と互いに行き来すること。「国際〇〇〇〇〇」
9　不公平な扱いをされたり迷惑を受けたりしたときに申し立てます
10　まんじゅうの中に入っています
11　式典などで使われる球形の飾り物。割れると中から紙吹雪やテープが飛び出すものもあります
14　森鴎外の名作「山椒大夫」は“安寿と〇〇〇〇”の物語です
16　趣味や娯楽など、心をウキウキさせてくれる事柄
17　高知県の旧国名

5月号の答え
ミノガサナイデエスオーエス

読者からのお便り

「おにぎりひろばプロジェクト」についての記事に関心を持ちました。「おにぎり」で食育をという学生さんの企画、nice idea だと思います。子どもが小学生の頃、少年野球のお弁当が「おにぎり」と「玉子焼き」のみと決まっていて「おにぎり」の中にいろんなおかずを潜ませたことを懐かしく思い出しました。
（小野市　冨田 優子さん）

今は、おうちの中ですごそう!!
子供たちにとっては、たいへんなことと思いますが、みんな頑張ってほしいです。今だから出来ること、今しか出来ないこといろいろあると思います。みんなで考えましょう!!
（尼崎市　アマバアバ）

クロスワードの正解者（抽選で10名）に、「リラックスつぼ押し」をプレゼント。本誌「きずな」へのご意見やご感想、人々とのふれあいを通した心温まるエピソードなどを募集しています。どしどしご投稿、ご応募ください。
※投稿掲載時はペンネームの使用も可能です。　※当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

応募方法
はがき、FAX、Eメールで受け付け。クロスワードの答え、郵便番号・住所、名前（ペンネームを使用の場合も要併記）、電話番号、年齢、職業、本誌へのご意見・ご感想を明記の上、ご応募ください。

応 募 先
〒650−0003　神戸市中央区山本通４丁目 22 番 15 号　県立のじぎく会館内
（公財）兵庫県人権啓発協会「きずな」ふれあいサロン係
TEL：078(242)5355　FAX：078(242) 5360　Eメール：info@hyogo-jinken.or.jp
＊応募者および投稿者の個人情報は管理を適切に行い、誌面づくり以外の目的には利用いたしません。

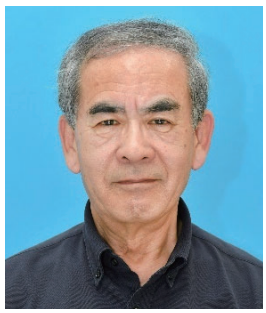
締め切り
7月22日（水）必着

緊急寄稿

新型コロナウイルス感染症と人権

優しい心
―コロナウイルス禍で

神戸新聞社　特別編集委員
林（はやし）　芳樹（よしき）　さん



プロフィール

1951年、南あわじ市生まれ。同志社大学卒。神戸新聞社で社会部副部長、論説副委員長などを経て編集局長、2012年から現職。著書に「それぞれの終章―読者と語る生と死」（社会部編）など。「火輪（かりん）の海―松方幸次郎とその時代」（共著）で村尾育英会学術賞。いずれも神戸新聞総合出版センター刊

神戸新聞の発言欄にこんな意見がありました。コロナウイルス禍についての投稿です。

「人には、優しい心と醜い心が同居しているようだ」

優しい心とは、不足するマスクを提供したいと思ったりする心、醜い心とは医療従事者らへの攻撃や偏見のこと、とあります。

兵庫県市川町出身の脚本家橋本忍さんもかつて、盟友黒沢明監督のテーマは「誰もが善と悪を背負って生きている」だったと書いていました。この数カ月を振り返ると、なるほどその通りだと思ってしまいます。

「人」を「社会」と言い換えてもいいでしょう。より弱い立場の人に何かできないかと考える人はこの社会にたくさんいます。一方で、感染した人に対するドキッとするほど冷たい視線もまた、この社会にあります。

医師の嗚咽（おえつ）

感染者の出た兵庫県内の病院勤務医が、記者の前で嗚咽（おえつ）を漏らしたという記事が忘れられません。深刻な風評被害や中傷にさらされながら、患者のすぐ近くで看護師たちは懸命に向き合っています。「その現実だけでも知ってほしい」と。胸が痛みました。

「感染は本人のせい」と思う傾向が欧米の人に比べて日本人は突出して高いそうです。なぜでしょう。やりきれない偏見の背景に、「本人のせい」と舌打ちするような意識が横たわっているのでしょうか。

でも冷静に考えたいと思います。感染するおそれはみんなにあります。いや、感染していることに気がつかず、ウイルスをまき散らしているかもしれません。

「ひと」としての品位

哲学者の鷲田清一（きよかず）さんが神戸新聞への寄稿で、コロナ禍で大切にしたいことを記していました。

それは、感染者をなじったりすることではなく「どのように共存するかに心を砕く」こと。そうでないと、「『ひと』としての品位も地に落ちる」と。

優しい心を抱きしめたい。

情報ぷらざ
information

HALF TIME

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、感染者やその家族、医療従事者等に対する誹謗中傷や差別的扱いが社会問題となっており、今月号は関連する記事を掲載しました。これからも新型コロナウイルス感染症に関連する人権啓発を継続していくことが大切だと感じています。（鄒）

「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2020」中止のお知らせ

8月は「人権文化をすすめる県民運動」推進強調月間です。兵庫県が市町と一体となった啓発活動として、毎年開催している「ひょうご・ヒューマンフェスティバル」は新型コロナウイルス感染症の影響のため中止します。

現在、オンラインを活用した新たな啓発事業を計画しています。詳細が決まり次第、お知らせします。

問い合わせ先　（公財）兵庫県人権啓発協会
○詳細については、下記（欄外）までお問い合わせください。

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。
兵庫県人権啓発協会　検索

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003　神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp

2020（令和2）年7月発行